

「〇し合う」人や動きを紹介する地域福祉マガジン

グッチョ

G u c c h o

VOL.38

TOPIC

高齢者とIT その界隈で、

2



-another contents-

【シリーズ 叶え合う支援】横並びのスタート 6

年明けに再び取材に行くと、榎原さんは常連らしき人と談笑中でした。「父の時代からのお客さんなんです」と紹介。ホークスの話、孫の話、食事の話。筆者が滞在した1時間を過ぎてもまだ話は終わらない。がんばるペイの話に及ぶと「私もしてみようかね」と乗り気の常連さんに「本当に便利。教えるよ」と榎原さん



(上) 榎原史子さんと母で店主のミヨコさん。同店内で撮影(下) お客さんが押してきたシルバーカー。「お店に来れる人はまだいいけど・・・」と榎原さん



高齢者とIT その界限で、 【老舗呉服店とコンビニカフェ】

スマホが広く普及し電子決済が主流になりつつある中、高齢者にはついていくのがなかなか難しい部分も。高齢者とITというテーマで取材に出てみると、その界限にはいろんなストーリーがありました。2つの事例を紹介します。

老舗商店が電子決済を導入

「お待たせしました！」。榎原史子さんは商店街の歳末福引の当番から息を切らせながら店に戻ってきました。取材は令和6年12月下旬。北野町で創業100年を超える「榎原呉服店」を切り盛りしています。

常連客の多くが高齢者。それでもプレミアム付き商品券の電子版「がんばるペイ」を導入しました。「80歳台になる池田さんというお客さんが『今年は電子版を買ってみようかな』って言い出したのがきっかけ。その便利さは知っていたので良い機会でした。」

榎原さんは、池田さんのスマホにアプリを入れるところからサポートしたそう。「アプリって言われても、年配の人はイメージが沸かないですよ。ダウンロードから購入申し込みまで一緒にしました。当選すると、次は現金をチャージしないといけないので一緒にコンビニへ」。榎原さんの車で行きました。聞く、他のお客さんの送迎やお使いも時折行っています。「お客さんにも免許返納している人が増えました。福引に行きたくても行けないと言われて、代わりにガラガラを回しに行ったこともありましたよ。」

日常の関係がIT化を後押し

「田舎の商売は顔ですから」と榎原さん。今でも「ツケ払い」が成り立つなど、商いの

形から距離感の近さと信頼が表れます。「そういう関係になると『今度入院するの』とか『長く家を空ける』とか暮らしの状況をポツポツと話してくれるんです。聞くことができることはしてあげたい。いつの間にか友達みたいな感覚になって」と暮らしの重なりが生まれています。

しかし、現実はどうもうまくいかないもの。「コロナ禍でお客様は一気に減りました。外出自粛で体力が落ちたり認知症を発症したりで、自力で買い物できなくなった人が多くて」。そういうお客さんへの配達も行います。「行くと『上がついていかんね』ってなって」。一緒にお茶を飲んで気づけば1時間超えということもしばしば。「すごくタイパの悪い配達。でも帰りに野菜をいただくこともあって、食費は浮いて助かるの」と笑います。

高齢者が電子化のきっかけをつくった背景には日常の関係性か、と考えている私に、榎原さんのお母さんが湯飲みを運んできました。「お客さんに天満宮の飴湯をいただいたの。甘いのは大丈夫？」。立ち上る湯気から漂う生姜の香りに包まれながら栄養補給。お母さん、ごちそうさまでした。

カフェコーナーに「ご予約席」

温まった体で次の現場・ファミリーマート久留米宮ノ陣店へ。カフェコーナーで高齢の皆さんが談笑していました。テーブルには手



カフェコーナーの大半が貸し切り。「平日14時から16時は客が少ないそうで。その分、参加の皆さんには無理のない範囲で買い物をお願いします。なるべくウィンウィンにね」

作りの「ご予約席」の立て札。コンビニで予約って、と思っていると「こっちこっち！」と私を呼ぶ声。ここでスマホ初心者講座を開催する江上憲一さんです。

第4金曜の14時から15時30分まで、近くに住む高齢者が対象です。メニューには「文字入力の手方」「LINE(ライン)の活用」「カレンダー機能を使う」など30項目。その日に学びたいものに参加者が選べます。指導するのは江上さんとサポート役の田中健一さん。この日はLINEの「友だち追加」「グループの作り方」が中心でした。「わー、なんか友達が一気に増えてる！どうして」と一人が慌てています。どうやら「友だち自動追加」を押してしまった様子。



北野町の加盟店で使えるがんばるペイは久留米東部商工会が発行。商工会も電子版導入を呼びかけていますが、商店街の客層は高齢者がメイン。導入が進みにくい状況があるようです。「確かに難しいけど誰かがサポートすれば何とか。それに商品券は500円単位とか1000円単位でしか使えないけど、電子版は1円単位で使えて便利ですし」と榎原さん



認知症カフェへの思いは今も変わらない樋口さん。見せてくれたのは昨年11月、「オレンジ協力隊」ののぼり旗を同店前に掲げた時の写真。認知症を発症した人や家族も暮らしやすい街づくりに取り組むチームのPRのためです。

身近な場所に活動があれば、いろんな人が関わるきっかけに。「認知症になっても安心して暮らすには『互いに知る』ことが大事。そして進行を遅らせるには、人に会ってあいさつして話しをすることが大事なんです」と樋口さん。



参加者は宮ノ陣に住んでいる人が中心ですが北野町など近隣地域からも来ています。江上さんは「私自身、別の場所で認知症カフェとスマホ講座の両方をやっていますが、スマホを入口にした方が人が来やすいですね。そこは意図的にやらないとね」と話します。

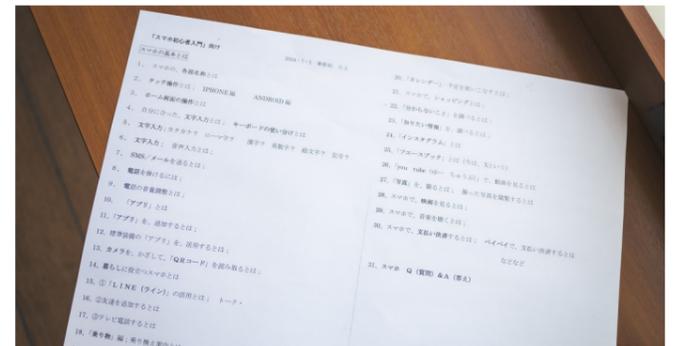
「友達追加するからQRコードを出して」「どこから出すの?」と矢継ぎ早に質問が。江上さんたちが丁寧にサポートします。

実は当初は、認知症カフェの開催を目指して活動が始まりました。仕掛け人は樋口寿さん。生活の動線にあるコンビニなら人が集まりやすいのではと、令和4年の春頃に同店オーナーに相談、すんなりと会場は決まりました。「なかなか人が集まらず、私にサポートの要請がありました」と江上さん。「認知症カフェって人集めが難しいんです。そこで多くの高齢者が苦戦するスマホを切り口にしました」。最初は2、3人の参加でしたが、「コンビニの入口に貼ったチラシや参加者からの口コミで徐々に参加者が増えました」と、今は指導役も含めて10人近く集まります。

昨年、樋口さんが認知症の診断を受けました。「きっかけがスマホでもこうして人が集まれば、自然と認知症カフェの機能も持ちますよね。それで十分価値があることだと思っんです」と江上さん。樋口さんは今も主催者の一人として参加しています。

買った巻きずしを頬張りながら取材していると、「ねえ、この赤いマークはどうやって消すの?開封して大丈夫?」と質問され、自然と私も指導役に。ふとコーヒーマシンの方に目をやると、出来上がりを待つ客がこの光景を眺めていました。

(担当・フトシ)



(左)「ご予約席」の立て札は店のオーナーが用意してくれたそう
(上)江上さんが毎回作成する講座メニュー。「終わった後は参加者に『解決しましたか?』と聞いています」

横並びのスタート あなたがいるところが居場所

記事:古賀 円

久留米市庄島町にあるコミュニティカフェ「ぶらっと・庄島」(運営:(一社)ぶらっとどっと)で、「8ぐらむCOFFEE」というプロジェクトが行われています。カウンターに横並びに立ち、8グラムの珈琲をドリップバッグに詰め、作業の後は全員で賄いを食べ雑談します。面と向かわず、横にいる人に手渡していき、一つずつ丁寧に出来上がっていく工程には静かな一体感があります。これは優しい珈琲の香り漂う場で、小さな偶然が重なり、そこに関わる人々の秘めた想いから生まれた出来事です。



林さんは、令和4年ぶらっと・庄島のことを知ります。当時、林さんは10代を家で過ごしていたため将来に不安を感じ、福岡県ひきこもり地域支援センター筑後サテライトオフィス(以下サテライト)に相談しました。サテライトの担当者と共にあらゆる所へ行き、その体験の中で会話が苦手な人が頑張っている姿を見て刺激を受けました。

ある日、林さんは、ぶらっと・庄島に行き8ぐらむCOFFEEのプロジェクトに参加し、同じくサテライトに相談をしている荒巻さんと出会いました。最初は殆ど会話はなく、作業後に飲んだ珈琲に「大人の味だ」と呟いた林さんの言葉に、荒巻さんが軽く笑って、その日から2人は時折話すようになりました。

雑談から生まれたアイデア

令和6年の春、林さんと荒巻さんはぶらっと・庄島の2階へ上がり、趣味の話や今の自分の状況などを話しました。林さんが「面白いことをしたい!」と伝えたところ、トライアスロン経験者の荒巻さんと「福岡マラソンに出よう」という話になりました。それをぶらっと・庄島スタッフの秋満美沙子さんに伝えると盛り上がり、練習用のLINEグループが立ち上がりました。それから、市内のサブトラックで定期的に2人が走る場面に人々がどんどん集まって来ました。

秋満さんは「最初は2人の一歩が嬉しくて全力で応援しようと思ってたけど、気づいたら一体感や張り合いがあつて自分事になつてた。これがゴールじゃなく、これからも一緒に見つけていきたい」と振り返って話します。

- 令和4年 8月 福岡県ひきこもり地域支援センター 筑後サテライトオフィス(以下サテライト)に向向く
- 令和5年 4月 サテライトの紹介で、人の集まるいろんな場所に担当者と一緒に歩いてみる
- 令和6年 2月 8ぐらむCOFFEEで、荒巻さんと出会う
- 5月 荒巻さんとの雑談の中で、2人でマラソン大会に出ることを決める
マラソンの練習を始める
2人に関係する人達とのLINEグループができる
- 6月 練習を重ね、応援チームが徐々にできてくる
その後2人はアルバイトを始める
- 7月 マラソンチームのメンバーと一緒に走り始める
- 11月 荒巻さんと福岡マラソン2024に出場
- 12月 福岡マラソン2024 打ち上げ開催

相談に来てくれる人それぞれの思いを尊重し、本人が持つ力を信じて関わらせていただいています。8ぐらむCOFFEEは、無理に話さなくてもいいし、柔らかく人と繋がれる場だと思います。

福岡県ひきこもり地域支援センター 筑後サテライト
コーディネーター(担当者)

居場所という言葉が嫌いなの。居場所は誰かが作るものじゃなくて、あなたがただいて、そこが居場所って思う。ひとりであつていい。ひとりでおれるなんて最高!

ぶらっと・庄島 秋満 美沙子 さん



それぞれの理由

マラソン未経験の林さんの出場の理由は「世の中に色々な人がいることを知れたかった。老若男女みんな同じ条件でスタートからゴールまで走る。それを体験してみたかった」ということでした。荒巻さんは「林さんが一緒にやろうと言ったから、出してみようと思った。いつかは出られたら、と前から思っていたけれど、きっかけがなくて。ただ目標のタイムはあったから、それに向けて練習した」と話します。

林さんは荒巻さんに走り方や靴選びなどを相談しながら、2人はチームの練習以外でも走り込みを重ねました。本番が迫るにつれ、プレッシャーも感じながら、「みんなの気持ちを背負って走らなきゃ」という想いで、大会当日を迎えました。

大会当日朝8時20分、14,000人及以上出場選手に交じって、2人もスタート。小雨の降る会場には仲間が駆けつけ、熱烈に2人を応援しました。林さんは折り返し地点で足が強烈に痛み、それでも走り続け、太腿が張ったまま完走を成し遂げました。荒巻さんも25キロ地点まで走って後半歩きながらも見事に完走。

サテライト担当者は「林さんは『どこまでやれるかやってみよう』と話してたから、望みを言える機会が増えてよかった。荒巻さんはレースの途中、みんなの声援に気づいてくれた気がした。2人の偶然が重なって、チームが生まれ、こんなチャレンジとなったのよね」と優しい表情で語ります。

大会を終えて

荒巻さんは「走っている間も『林さんはちゃんと走れているかな』と思つてたから、完走と聞いて『すごいな!』と感じた。機会があればまた出たい」と。林さんは「小さな事からこんな大きな事になるとは思つてなくて。外に出て色々な選択をしたけれど、マラソンは過程も楽しく、一番変化があつて面白かった。支援員として応援してくれる人は沢山見たけれど、マラソンチームはそれを越えたものを感じた。ずっと家にいたから人を信用できなかつたけれど、心の底から嬉しかった」と振り返りました。

その後、荒巻さんは2週間後に八女ハーフマラソンに出場し完走。林さんは打ち上げの最後に「またみんなで一緒に走りましょう!」と、その言葉は力強いものがありました。

偶然の重なりから、生み出された小さなストーリー。誰かの発意が誰かの原動力となり、何かを少しずつ変えようというエネルギーが循環します。2人のゴールからまた新たに何かが始まります。

事業を担う「個」の集合体
久留米 AU-formal 実行委員会

市民活動団体で活動する個人が集まり結成。今年度から参加支援事業を担います。



※写真は、林さんと共に走るマラソンチームの様子

特別号
叶え合う支援
詳細掲載!

グッチョ
Vol.36 特別号

＼地域福祉マガジン／



久留米市
健康福祉部地域福祉課
〒830-8520
久留米市城南町15-3
☎0942-30-9175
Fax0942-30-9752

＼グッチョはWEBで配信中／

グッチョは市ホームページで読めます
1～2か月に1回、最新号を配信中

